半歩遅れの読書術

川上 弘美

気になる本

周りばかり覚えている

気になる本、というものがある。

好きな本、ともちがう。感動した本、ともちがう。

嫌いな本、なのでもない。

マルグリット・デュラス著『廊下で座っているおとこ』（小沼純一訳、書肆山田、一九九四年）は、私にとって、気になる本である。

数年前に、ふらりと入った本屋さんで買った。勧められたのである。「僕にはとっても共感できた本だったから」と知人に言われたのである。なかなか見つからなかったが、ある日町の小さな本屋さんで、発見した。天井の低い、親密な感じの本屋さんだったことをよく覚えている。それ以来一回もその本屋さんに行く機会はないのだが、空気の匂いまでを、今もはっきりと思い出す。

読みおえて、私は「いいな」とは思わなかった。デュラスらしい、困難な、そしてまたエロティックなテクストである。もともと私はデュラスが好きなのだ。しかし素直に「よし」とは思えなかった。それよりも、私は気を散らせていたのである。勧めてくれた人の「共感できた」という言葉に。いったい彼がどの程度このテクストに共感したのか。彼のどんな意識が共感を呼び寄せたのか。

もしかしたら、私は勧めてくれた人のことを少しばかり好きだったのかもしれない。いや、かもしれない、なんてもったいぶった言い方はよそう。自分が誰を好きかどうかくらい、この年になってわからなくてどうする。私は、その人が好きだったのだ。

それで、デュラスのこの本が読めなくなった。近視眼になってしまった。または遠視に？　どちらにしても、テクスト以外のものばかりに、目が行くようになってしまったのである。

その人のことを好きだったが、それだけだった。何も起こらず、何も失われなかった。だから、今も私はデュラスのこの本のことが、気にかかるのである。本が置いてあった棚にどんなふうに電灯からの光が影をつくっていたか。本屋さんの店主がどんなチョッキを着ていたか。紙袋から買った本を取りだして表紙の折り返しに触れたときにどんな気持ちになったか。部屋で一人頁をめくっている最中に外を走っていった消防車のサイレンの音がどんなふうに私の耳につきささったか。

みんな、鮮明に覚えている。覚えていないのは、テクストの文章ばかりである。文章のまわりにあった他のすべては、こんなにありありと、覚えているというのに。

（作家）